《熊本県美術家連盟主催》

美術講演会

平成25年10月26日（土）
熊本県立美術館・本館（講堂）

◎演題　「ミケランジェロ作
《システィナ礼拝堂天井画》をめぐる一考察」

◎講師　吉川　登　先生　熊本大学名誉教授

今回の美術講演会は、熊本県美術家連盟に昨年度より設けられた「美術理論」部門の委員で、熊本大学名誉教授の吉川登先生にお願いいたしました。先生は、皆様ご存知のように京都大学のご出身で1980年から熊本大学に赴任され、教育学部美術科で専門の美術史や鑑賞教育、それに大学改革等に長年携わって来られました。著書には、今回のテーマと重なる『ミケランジェロ―作品の分析と概説―』（杉山書店）などがあります。

吉川先生が長年研究されてこられたルネサンスの三大天才の一人、ミケランジェロのシスティナ礼拝堂壁画の中央部分の構想や意味について、謎とされていたことに関してこれまでの諸説とともに、先生の研究成果をお話していただく貴重な機会になりました。

＊

ローマのヴァチカンにあるミケランジェロの《システィナ礼拝堂天井画》は、世界の研究者が研究しているにもかかわらず依然として謎の多い作品である。この天井画は、1508年4月の初めにローマ教皇ユリウス二世が制作をミケランジェロに依頼、翌5月から制作に着手され、1512年の10月、四年半ほどかけて完成された。

最初、与えられたテーマは「十二使徒」と装飾だったが、ミケランジェロはこれを「貧弱」と考えた。ユリウス二世は「お前の好きなように」と言い、テーマは変更された。しかし、こういう重要な場所の絵画プログラムをミケランジェロ一人の自由に任せたはずはないと、考えられている。教皇庁内の神学者の助言を聞きながら、最終的にミケランジェロの表現にゆだねられたと考えて良い。礼拝堂は、側壁に「モーゼの生涯」と「キリストの生涯」が既に描かれていたので、ミケランジェロの天井画には「モーゼ以前の世界」を描くことになった。

＊

「世界の創造」「人間の創造」「ノアの物語」をテーマとする天井画中央部の構成には、3という数が強調されている。これは「聖三位一体」の理念の表れであろう。これと関連して「父」の概念が強調されている。なぜなら「父」は三位一体の源泉であるから。それで、天井画中央部には三種類の父（エホバ、アダム、ノア）が登場する。また、天井画全体の構成の根底には、旧約聖書の世界を新約聖書の世界の予告とする予型論的思考が張り巡らされている。この思考法によれば、たとえば、旧約の「ノアの洪水」は新約の「キリストの洗礼」を意味するのである。こうした基本的枠組みの中に、ミケランジェロは、自らの芸術創造に対する考察を重ね合わせた。つまり、神による世界の「創造」と芸術家の「制作」が本質的に同等の行為として描き出されるのである。これまでこの中央部の描写にはいくつかの疑問点が出されている。「旧約聖書の創世記の物語からどのような視点で描く題材を選んだのか」、そして「世界創造の何日目を描いたのか」、「時間的な順序に従っていないのはなぜか」など。いずれも納得のいく解答はいまだ提出されていない。例えば、ヴァチカンの公式案内書によると、図1は「光と闇の分離」つまり一日目、図2は「太陽、月、植物の創造」

これは四日目と三日目、図3は「水陸の分離」三日目。この考え方でいくと、六日間の創造のうち、二日目と五日目は描かず、三日目を二度にわたって描くことになる。ミケランジェロがそんな不可解な描き方をしたとは考えられない。実際には図2以外は何が描かれ何が創造されたかはよく分からないのである。ミケランジェロの描き方は、それ以前のものとは全く異なっていて、神が能動的に行為するさまが強調されている。つまり、創造された物（被造物）の具体的な描写の観点ではなく、創造主体の「行為」の観点から描かれているのである。この点を見損なうと、謎はいつまでも解けないままである。

＊

そこで、ミケランジェロは「世界の創造」を「行為」の視点から描いたという仮説を立てると、これまでの難点が解消し、天井画中央部に首尾一貫した説明を与えることができる。「行為」は必然的に時間的経過を伴い、「開始」「進行中」「完了」の三つの局面を有する。六日間の世界の創造を描く図1～3の三つの場面は、六日間の被造物をまんべんなく描くのではなく、創造の「開始」「進行中」「完了」という時間的な経過の三局面を描いているのではないか。つまり、図1は「創造の開始」を描く。この場面では、世界が生み出される前の状態、つまり形態もなく方向もない状況が描き出されている。ミケランジェロはここで、無から創造する神の行為を、粘土という無形態の物質から形態を肉付けする彫刻家の制作行為のように描いた。そしてそのことで、彫刻家の制作が神の創造と等しい行為であるということを言おうとしたように見える。次に、図2は「創造の進行中」を表す。この場面で初めて具体的な被造物の描写が現れるのは、すでに世界が創造されつつあり、形態と方向を明確にし始めていることを示すためである。論理的に言えば、この場面で世界創造の六日間の全ての被造物が描き込まれなければならないはずだが、現実的に不可能なので、ミケランジェロは、天地創造の代表格である太陽・月（天）と大地・植物（地）を描くことによって「世界」を要約したとみなせるのである。天地を描くことにより、上下の方向性が確定し、さらにこの場面では右から左への急激な神の移動を描くことにより、左右の方向性を確定した。こうして「世界」がくっきりと姿を現すのである。そして図3は「創造の完了」を表す。この場面の神はもっとも静かであり、下方に広がる創造された世界を祝福し、マントの中には「3」人のプットーがいて創造された世界の完全性を表している。

《システィナ礼拝堂天井画》の中央部分の物語の場面は、教会当局の考えとミケランジェロの「創造論」が交錯・融合して成立したと考えることが出来る。

（要約文責・井上　正敏）